平成27年度教員研修会・教育講演会収録

（2016年３月３日受理）

平成２７年度　第１回教員研修会

「岩手の教員に期待すること」

講師　岩手県教育委員会事務局教職員課
首席経営指導主事兼小中
学校人事課長　佐藤　進先生

新妻学部長：現在の肩書を基にお話を頂くという事にさせていただければ大変ありがたいなと思います。

佐藤先生は、もう皆さんがご存知ですから私と大学の関わりの方をご紹介させて申し上げたいと思います。

佐藤先生は、上田中学校に長くお勤め頂いたときに、実習主任も長い間担当して頂いたんですね。丁度偶然私も実習担当の委員長をやっていた頃で、佐藤先生には実習生いわゆる本学部の学生諸君については非常にお世話頂いただけではなく暖かいご指導を頂いたなあという事を思い出しております。加えてですね、ここ数年来の出来事を話しますと、皆さんご存知のように今、来年から教育学部、学部の改革、改組とですね教職大学院の設置ということが今進められています。

今、文部科学省とやり取りしている最中で最終的には８月末位に決まるという事になっています。

このどちらも学部も、大学院も県と或いは学校現場の関係者と協議しながら設置を或いは改革を進めて行くという段取りをとらなければならないことになっております。

現在、佐藤先生の小中学校人事課長という立場でこの１，２年県のお仕事だけでも大変だという事が我々はたから見ても大変だと思うんですけれど教職大学院の設置やら学部改革やらで、ご協力どころか多大なご尽力を頂いてようやく教育学部の改革改組がある意味日の目を見るところまで来たという風に言っても過言ではないと思います。

そういう先生を今日のような場面に引き出して使うという了見は何だと聞かれれば大変困るわけなのですけれど・・・。色んなご苦労が佐藤先生にかかっているとは思いますが、今日は若い学生諸君が多いようですので是非学生たちに向かって励ましやら激励やら厳しく一つお願いできればありがたいなあという事でございます。われわれも、これからの岩手の教育を考えるにあたって佐藤先生のご協力、ご尽力を賜ったことを活かせるようにこれから励んでまいりたいと思いますので本日はどうぞ宜しくお願い致します。

立花先生：それでは、講師先生を宇佐美センター長が致します。

宇佐美先生：本日、ご講演をいただきます、岩手県教育委員会事務局　教職員課　首席経営指導主事兼小中学校人事課長佐藤　進先生のご紹介を申し上げます。

佐藤先生は、盛岡市のご出身です。

東京農業大学農学部をご卒業され、昭和56年4月から教職につかれました。

初任校は、久慈市立山根中学校、続いて、大野村立大野第一中学校（現在、洋野町）、そして、盛岡市立城東中学校、盛岡市立上田中学校に勤務されました。平成12年からは、その指導力やお人柄が高く評価され、専門である理科教育を中心としながら、水沢教育事務所（現県南教育事務所）指導主事としてお勤めになられました。その後、盛岡教育事務所主任管理主事、平成15年からは、岩手県教育委員会事務局教職員課小中学校教員の人事担当主任管理主事として、岩手県内の小中学校人事管理等の仕事に当たられました。

平成20年、岩手町立川口中学校長として2年間お勤めになった後、再び教育行政に戻られ、盛岡教育事務所教務課長、平成23年4月からは、宮古教育事務所長として、震災直後の混乱の中、宮古教育事務所管内の小中学校の学校再開へ大きな力を発揮されました。そして、平成25年には、岩手県教育委員会事務局学校教育室首席指導主事兼義務教育課長、翌平成26年からは、岩手県教育委員会教職員課首席経営指導主事兼小中学校人事課長として、岩手県教育行政のリーダーとしてご活躍中でございます。

本日は、「岩手の教員に期待すること」と題しまして、ご講演をいただきます。豊富な行政経験、また、震災後の復興に行政としてかかわってきた経験をもとに、今後の岩手の教員として、また、教職に就くもの、あるいは、それを目指すものにとって何が大切なのか等示唆に富むお話を伺うことができるものと大変楽しみにしております。

それでは、ただいまから、「岩手の教員に期待すること」と題しまして、ご講演をいただきます。佐藤先生、よろしくお願いいたします。

１　「震災から4年、教育の復興を目指して」

折角のお休みの中このようにお集まりいただき大変有り難うございます。

２年前に学校教育室義務教育課長という立場で、ここでお話しをする機会を頂きました。

その時は、「復興教育と岩手の教員に期待すること」という内容でありましたが、今回は小中人事課長という立場でありますので、私個人としましては２年前と大きく変わらないどころか少し年をとって体力が落ちているという状況ではありますが、今の立場で考えていることについてお話をさせて頂きます。

小中人事担当…。肩書ばかり長くて学生の方は特にもどんな仕事をしているのだろうと思うかもしれませんが、私の仕事の内容としては大きく分けて５つあります。

１つ目は、「県費負担教職員の人事管理」に関することであります。県費負担教職員とはなんぞや？という話になるのですが、市町村立の先生方は市町村の職員になります。盛岡市立の学校に勤務する先生は盛岡市の職員です。滝沢市に勤務する先生は滝沢市の職員となります。ただ市町村によって給料等が異なると人事異動により給料が上がったり下がったりすると色々面倒なことがあるということで、同一の給料表で支給しましょうということ等があり、給料は県費で支出しますようということもあって「県費負担教職員」と呼んでいます。

例えば、人事異動の際、盛岡市から滝沢市に転勤するときに比較的簡単な手続きで異動できるということもあります。いずれそういう人事に関する企画等々行っているのが１つ目であります。

２つ目は、任免に関することです。
任免とは「任用」することと「免じる」辞めることに関することであります。教員採用試験は「任用」に関係する業務の一部ということになります。

３つ目は、分限および懲戒に関すること。何か好ましくないことが起こった時にどのように処理していくかについて検討する担当ということであります。これについてはあまり明るい話ではありませんが…。昨年度は、そういうことによって大きな問題が１８件ほど起こっていて、先生方にもう少し襟を正して勤務していきましょうという通知を出しながら県としても頑張っているところであります。

４つ目は、人事管理面での研修です。
先生方にもう少し力をつけていただきましょうということで、研修に関することも当方でしています。

最後、５つ目ですが市町村立の小中学校の学級編制及び教職員定数についてであります。これについては少し難しい部分もあるのですが、義務教育については学級数によって先生の数が決まっていくということで、児童生徒数や先生方の人数に関する管理をしているということであります。

何となく、そんな仕事をしている人なんだなという目で、とりあえず見て頂ければと思います。

私の経歴は、先ほど紹介して頂いた内容になる

わけですけれど、今の私を作っているのは、これまでの経験によるものであると思っています。「佐藤進」という私個人のキャパシティーはあまり変わらないという風に思っています。ただそこに何を入れて今の私があるかと言うと、私という人間がどういう経験をしたか、どのような人と出会って感化されてきたのかによって今があると思っています。様々な人との出会いや出来事を通して、どのような自分が形作られていくか。無限の可能性があるのだと思います。

例えばパソコンだとすればハードディスクの容量とかCPU等の作りというのはほぼ決まっているのかもしれませんが、そこにどんなソフトをのっけて仕事をするのか、ワードを入れようかな、一太郎、エクセル入れようかな、アクセスがいいかな、イラストレーターは欲しいけど、フォトショップはいらないとか…。どんなソフトをマシンに載せていくか、使い慣れたソフトの方がいいからバージョンアップさせなくてそのままでいい。もっと優れたソフトをのっけていこうとか、その人の使い方で全く違うパソコンの使い方ができるわけですよね。人であればましてやであります。

先程、私の経歴について紹介して頂きましたが、自分の職歴を振り返ってみると、初任の時には、へき地２級、もう廃校になってしまいましたが久慈の極小規模校でスタートしました。全校生徒３０～４０名の学校でした。そこで教員としてのイロハを先輩から学びました。二校目はですね、ちょっとこれ、先ほど名前が挙がったので言いにくいところがあるんですけれど、当時大変荒れた学校でした。具体的な内容は言えません。言えませんが、そういう中で生徒指導のノウハウ、集団作りの方法を学びました。命がけでありました。当時は、中学生が荒れている時代でしたので本当に命がけでありました。三番目は、盛岡の学校に転勤になりましたが、その時はもう１０年くらいこの職をやっていましたのである程度自分のペースで仕事を進めることができるようになってきて、生徒会担当を通しながら学校全体を動かす楽しさを学んだりしました。四校目は、上田中学校ということで新妻先生にも紹介して頂きましたが、教科の専門性を学びました。実習生担当もしましたので、そこでも何人かの先生に出会うことができました。塚野先生には、大変お世話になりました。当時は、立花先生は同僚でありました。

次は、「指導主事」になって２年間勤務し、県の教育行政に携わり、その後、管理主事…そんな中、最大の出来事が東日本大震災でありました。2011.3.11私は、そのときに盛岡教育事務所というところで教務課長という仕事をしていました。その時は人事異動作業がほぼ終わり、約1,800人分の「辞令書」の仕分けをして、各教育事務所へ配布するための作業を終えようとしているタイミングでありました。気持ちは既に新年度に向いていた2時46分でありました。

あれから、４年３か月が経過して、そして今があるということなのですね。お集まりの皆さんにもそれぞれの3.11があったかと思います。当時の新聞を持ってきました。本県においても震災のことが風化しているという話がよく聞かれます。私もそういう自分を感じるところがあります。こういうのを見ると、「あの時そうだったなあ」、と振り返えったり「今自分がどうしなければならないか」ということを思い出させてくれたりします。

（フラッシュバックするのは嫌だという人は見ないで頂ければと思います…。）

3.12の新聞です。記憶にありますか？岩手日報ですけど、被害の大きさが正確にはまだ分からないという状況です。まあ、大変なことになった。「さてこれからどうしていったらいいのだろう・・・。」ということで、それから３月いっぱい土日なく不眠不休で岩手の教育をどうしていったらいいのかなあという話が始まるわけです。そのとき、今日いらしている八巻先生は盛岡市の教育長でいらして、市町村の教育委員会とも連携しながら取り組みが始まったということであります。一週間後に私は、宮古教育事務所の所長としての辞令を頂きました。これが3.13の新聞ですが、写真は宮古です。まさか、こういうところに行くとは思わなかったんですけれど、私なりに覚悟がいる転勤であ

りました。

私が宮古に勤務することは震災の起こる前から決まっていましたが、このような状況の宮古に赴任するとは思っても見なかったわけであります。甚大な被害を受けた宮古で所長としてどのような仕事をしていけばいいのか、正直不安でいっぱいでありました。「大変なことになったんだなあ。でもこれは、自分に与えられた運命なのかなあ」という風に思って着任いたしました。様々被害を受けた方々に対しては、不謹慎な言い方なのかもしれませんが、そこで生活した２年間は、非常に貴重な２年間でありました。私の人生観、職業観を変える時間になったのであります。宮古管内では、通常通りには入学式は当然できません。私の仕事は、とにかく現地を回るということで、ガソリンがない中ではありましたが、宮古市、山田町、岩泉町、田野畑村を駆け回っていいました。飛び込みで学校に行ったり、教育委員会に行ったりして、「何かやって欲しいことはありませんか、何をすればいいですか？県はどうすればいいでしょうか。」という話で、いわば御用聞きのような仕事をしていました。

［映像］

震災後１か月の様子。

過激な映像は出てきませんが、フラッシュバックする人は目を避けて頂いてということで…。

宮古市マース。ここで助かった高校生とか何人もの方がいらっしゃいました。これが赤前小学校の入学式です。きっと、４月２５日、２６日とか、そんな時の体育館であります。避難所になっているんですね。避難所での入学式です。こういう入学式はなかなかない。右のほうに「青森」というゼッケンをつけた人がいますが、各県からの支援者がこうやって避難所を運営してくれていました。これが入学式です。「ああ、なるほどなあ」と思ったのは、避難所生活をしていた赤前小学校の子ども達は何をしたかというと空箱と壊れた机の天板を持ってきて自分用の机を作ったんです。勉強する場所を自分で作ったんですね。学ぼうとする、勉強をする場所の確保のために作ったんですね。けな気というかこういうものなんだなと思いました。こうやって支援物資を集めてきては、勉強するための環境を自分で作った。もらった靴など目新しい白さが逆に痛々しい気がします。発生から１か月以上経ってようやく4月下旬に入学式ができましたということであります。

これは２年生以上の子ども達、シアトルからの贈り物の千羽鶴とかもきていました。手を取り合いながら、この時はもうAKBルックですね。小学生全員がAKBの服装でした。不自由な生活の中でも子ども達にこのような服装で入学式を迎えさせようとする親心を感じることができました。入学式を見てくれているのは避難所生活をしている、おじいさん、おばあさん。若い方々は仕事に行っているのでしょう、避難所生活を送っている方々から拍手をもらいながら入学式。入学生は５人なんですね。新入生と校長先生です。ここだけ見ると普通の入学式ですけれどもね。2年生が縄跳びの手本を見せている様子です。この方、今は、休んでいるんですがマンドリン奏者の「清心」さん、慰問っていうか激励にきてプレゼントを配布しながら歌も歌ってもらって・・・。地域の方々も見ている。洗濯物も干している中、入学式が行われた。これが町の様子です。これが鵜磯小学校です。何年か前にここに管外学事視察というので訪れた学校だったので、まさかこうなっているとは・・・ということであります。

学校内の備品が校庭に運び出され山積みされている様子です。時計を見ると２：５０位を示している。これが行事予定黒板。誰も3.11こういうことが起こるとはわからず１２日以降のスケジュールも書かれています。3.11は３時から式場設営。まさに式場設営しようとしている矢先に大きな地震に見舞われたということが分かります。向こうに海岸線があります。あの海岸線がずっと寄って、ここ１階部分を飲み込むくらいの津波が来た。学校はもぬけの殻ですので、ここに連絡してくださいと貼紙があったりします。これが教員住宅です。発生が夜中だったりしたらもっと大きな被害になっていたと思われます。

これが町の様子。海からの水が川を逆流して遡上していくような感じ。これは千鶏小学校というところです。ここも海岸線がだいぶ下に見えるのですが１階部分が崩壊したというところです。ここは、本州最東端の小学校で有名です。時計がまさに２時４６分を指しています。これが船越小学校です。確かここで､塚野先生にお会いしました。岩手大学の皆さんと塚野先生もボランティアで来ていただいて、思わず「先生！！」という再会があったところです。ここは体育館です。体育館は泥がかぶっている。当時は2階部分に車が乗り上げていたりしました。２階部分まで水は入ってきました。流木等でやられて破壊されている状況です。現在、鵜磯小学校と千鶏小学校は統合して重茂小学校になりました。ここには新校舎ができました。落成して新しい校舎に入っています。この山側の方に盛土しながら新校舎が建っている。機会があれば山田の方に行って見学していただければと思います。この校舎は解体されてしまいましたが、様々散乱している状況です。そして、防潮堤と防波堤、こんな大きいコンクリートもなぎ倒されている状況でした。津波の被害はその境目がはっきりしており、あるところから向こうからほんのちょっと高いだけで全く家は大丈夫なんです。ちょっと低いだけでこうなってしまう､５ｍ、１０ｍ家の位置が違うだけで明暗が分かれてしまう。これも厳しい現実だと思いました。お隣さん同士で「〇〇さんはいいよね、家が残って」というような微妙な感情があったと聞いています。

船越小学校は「陸中青少年の家」を間借りし再開しました。

カメラを向いて子ども達は笑っているんですよね､「救いだな」と思いました。笑っている､「どこのおじさんが来たの」みたいな感じでとりあえず「笑ってくれる」んですね。これは、寺子屋方式。椅子ではなくて正座や安座で授業です。この格好で一日勉強です。大変疲れます。こうやって勉強を再開しました。これが職員室。パーテーションで区切っての職員室です。これも子ども達は笑ってます。スクールバスを待っている子ども達なんですが｡こうやって手を振ってくれたりする。そしてこれが、岩泉の小本中学校のプールです。屋内プール、立派なプールだったんですが全く使えなくなってしまった。来年度、仮設校舎が完成する予定。こんな立派な校舎なのに使えなくなると本当にもったいない。これはきれいになった後ですね。

・・・ということがありました。

このような映像が私の頭の中に焼き付いており、様々な事を思い出します。今回の震災で私は何も失うことがありませんでしたが、いずれこのことを絶対忘れることなく今の仕事を全うしていかなければならない、そういう使命があるんだろうと思っているところです。

２　「何のために」

次に２番の「何のために」ということについてお話ししたいと思います。

それから１年ほどの時間がたち、学校も通常を取り戻してきました。これは大槌中学校で作成したDVDであります。

〔映像〕

映像の中にいる中学生は、お集りの方と同じ世代ではないでしょうか…。現在は高校３年生、大学生になっている彼ら、彼女らであります。いずれ様々な方々の支えがあって子ども達に笑顔が戻ってきたということであります。

（1）　教員を目指す理由

2番(１)には「教員を目指す理由」という項目を挙げさせて頂きました｡本日の研修会の演題は、「岩手の教員に期待すること」でありますが、きっと、ここにきている方のほとんどは教員を目指す方々なんだろうなと思うのですが、何で教員を目指すのか、何のために先生になろうとして勉強しているのか、そして、どうして今日ここに来たのか、ということです。

日常の中で「何のために」と考えることはなかなかないですけれども。実は、何のためにというのは非常に大切な事であると考えます。どんな仕

事もそうですが、どうして自分はその仕事を目指すのか､本当に自分がしたい仕事に出会えた時に、仕事に向かうエネルギーというのはマックスになるんじゃないのかなあ、だからこそ困難にぶつかっても乗り越えることができる自分になれるのかなと思います。

また宮古での話で恐縮ですが、豊間根という地区に「ＦＢ」というコネクター関係の会社があります。そこの会長さんに「ちょいと来い」ということでお話を伺いに行きました。

「自分は、パート５人でスタートしたこの会社で、現在は従業員２５０名を抱えている。毎年苦しいけれど１０名程度地元高校生を確実に新規採用している。年商３０億から４０億の会社に育て上げた。アイフォンの中にもうちの工場の製品が使われているんだ。」という話をされました。

その話の中で「同じ機械を使っても、使う人間によって製品のレベルが変わってくる。それは、技術力ではなくて人間性や仕事に対する取り組む姿勢の違いによって現れる。」と言っていました。「なので、社員に技術やノウハウの伝授とは別に人間としてのあるべき姿、社会人としての基礎的な教養を教えているんだ。この業界でも、中国とか韓国なんかがものすごい勢いで部品が入ってきてくる。日本を追い上げてきている。そんな時代に自分の会社だけが人間育成に取り組んでもこんな地方の片田舎に、いずれ仕事が回ってこなくなる。将来のことを考えるのであれば宮古市全体がきちんとものづくりできる町にならなければならない。全体でものづくりができる人材を育てていかなければならない。そういう時に、教育は何をやっているんだ。」即答できませんでした。なるほどなあ仕事に向かう姿勢の大切さ、仕事に対する視野の広さ、一流の会社経営者はそういうことを考えているだなあ、と思いました。

こんな話もちょっと聞いていただきたい。

（本を読む「レジ打ちの女」）

これは「人ってなかなか変わらない」「なかなか変わらない」ということは、「変わるんだ」と言うことを示している物語なんだと思います。

単純な仕事をつまらないと思うか、それともその中に価値を見出して働くのか、その違いが大きな差を生み出すことになる。人から与えられるのではなくて、自らが仕事の意義を見つけることのできる人こそ本当に力がある人であり、自らを成長させていく力を備えた人と言えます。

全てのことに意味があってその中に価値を見出すことができる人が一番強い人であると思います。「何のために」ということは日頃あまり考えないことであると思いますが、今日この機会を生かし、ちょっと考えて頂ければと思いお話をいたしました。

（２） 教員としての目標

先ほど、宮古の勤務の話をしましたけれど、自分の人生の節目、節目を振り返ったとき、「何でこうなるのかなあ」と思うことがあります。「これも運命なのかなあ」という風に思ったりもします。

そういうこと皆さんないですか？まあ、私は、運命論者でもなければ当然スピリチュアルに興味がある人間でもありません。どちらかといえば非常に現実的なものの考えをするタイプなんですが、「運命だからしようがない」と簡単に片づけてしまうようなことではいけないんだろうなと思います。

運命というのは、命を運ぶと書きます。命の運び方というのは、誰かに委ねることではなく自分が決めることなんじゃあないのかなあ・・・。例えば、私が教員になったのは運命ではなくて似たような言葉として「宿命」というのがあって、教員養成大学出身者でない私が教員になったのは宿命なのかな。そういうことが、自分が生まれたときに宿っていたのかなと思うようにしています。様々な人との出会いや出来事の中で導かれながら教員になる宿命が私の中にあったのかな、という風に考えています。何の根拠もないですけれども自分の中では、なるべくしてなった。宮古に赴任するのも、なるべくしてなった。ここで話しているのもなるべくしてなった…。

そうしたのは、自分を自分でそこに運んで行っ

たんだなあという風に考えるようにしています。なので、思うように事が運ばないことはたくさんありますが、これも人生の一部と考えて悲観しないようにしています。それを決めるのは自分自身だと、腹に決めて考えるようにしています。うまくいかない時こそ、そう思うようにしているんですね。

例えば、山登りで考えると頂上に到達することが最終目標だとすると、そのためには小さな目標がいくつもあります。何を、どこまで、どのようにということを計画的に進めることでようやく高い山でも上ることができます。山登りが好きな人にとっては、いつ、どの山に、どのようなコースで上るのかということを計画し、達成することを目標にして頑張るのだと思います。そして、目標を達成した時の困難に打ち勝って登りきった時、爽快感、達成感を味わう事がきっと病みつきになってくるんだと思います。登ることそのものが目的であれば飛行機やヘリコプターにポンと乗っかればそれでいいのですが、自分の足で苦労して登ったところに意義があるんだと思います。

何のために教員を目指しているのか、何のために教員になったのかという目的や目標を明確にしながらそれを達成していく「目標づくり」が必要になってくると思います。

なぜこんな話をするのかというと、昨年度、今年度と１１２名の新採用者を任用致しました。それぞれの方が夢を持って採用を果たしたにも関わらず、残念なことに途中リタイヤしている人が何人かいます。合格者全員が翌年度正式採用なるということが、ここ数年ありません。学校現場、市町村の教育委員会そして任用側の県の教育委員会もその責任を重く受け止め、そして新規採用者に対して一層のケアとフォローをしていかなければならないと考えているところであります。

一方で、採用を目指している方々についても教員の道を選ぶということはどのような事なのか考えて頂きたいと思います。本年度教員採用試験を目指している方の目標は何でしょうか？きっとほぼ全員の方が「教員採用試験に合格すること」という風に答えるんじゃないかと。それは正解であります。ただ、本日参加している皆さんには少し高い目標を持っていただきたいと思います。試験に合格することを目標にしている人は合格することで安心してしまいます。よって、その先に待ち構えている様々な困難に対する心構えがなく疲弊してしまうことがあります。

実は、職員室の先生方は平均年齢が４５歳以上です。先生方の高齢化が進んでおり、場合によっては２０代、３０代がいない。自分だけ２０代、３０代で、あとは全員５０代という職場もあります。相談できる人が同世代にいない、周りにいないという状況があるかもしれません。実際先生になってみると、教科指導、学級経営、そして生身の子供たちと日々対峙し格闘の毎日です。思ったように事が運ばないということが多く、うまくいくのは実は奇跡に近いという事であります。うまくいかないことが当たり前で、そのこと一つ一つが教材であるというように考えられるかどうかということであります。ちなみにトレーニングしなければ体力はつかないわけなんです。楽していては自分の成長はありません。つらい経験を自分を生かすための貴重な経験と考えられるかどうかです。また、困った時、つらい時に「困っています」と自分のことを伝えることができる素直さがあるかどうかです。子ども達に、「なんか困っているときには先生に相談しなさい」というじゃないですか、そう言っておきながら自分が体調を崩すまで誰にも相談できないということでは厳しい話をすれば、自己マネジメントの力が育っていないという風に言われても仕方ないわけです。

相談できる人とできない人は何が違うか、それは「挑戦している人」かそうでない人かの違いだと思います。挑戦している人は、うまくいかないことが当たり前なんで「助けてください」と言えるんです。そして、挑戦している人同士はそれがわかっているので「僕でよかったら何でもしてあげるよ、何でも助けてあげるよ」と言えるんです。「はい、喜んで」と言ってくれるんです。頼んでも面倒くさそうな顔はしません。挑戦したことが

ない人、挑戦することに怯えている人は「やめたほうがいいよ、失敗するに決まっているよ、傷つくよ。」そんなアドバイスしかしてくれません。自分の殻から外に出ようとしないという事であります。

「教員になること」が目標の人は、教員になることで目標が達成されたということになりますが、「教員になって〇〇することが目標です。」と言える人は、多少のトラブルにも対応することができると思います。それは、「教員になっても何も成し遂げていない」からです。どこに目標を設定するかであります。

教員採用試験には、筆答とか実技とか面接があります。そこで点数を稼いで見事合格を勝ち取ろうとする人とその次の世界を想定している人の厚みはものすごく違ってくると思います。例えば、「自分はピアノが苦手だ、しかしピアノは二次試験なので一次の合否を見てからの準備でいい。」と思うか、「教員になったならば学級担任をして子ども達にこの歌を歌わせて、この歌の素晴らしさを伝えたいのだ。それが自分の目標なのだ」という風に思えば下手くそであっても時間を見つけて練習しようと思うのではないのかな。そして試験の時、下手くそでもピアノの向こうに子ども達の顔が想像できる人の音は違うんじゃないのかなと思います。

過去の話でありますが、教員採用試験の時にこのような話をしてくれた人がいました。「自分は電車で大学に通っているので盛岡に住んでいる人と比べると非常にハンディがある。でも同じようにハンディを抱えている者同士で時間を上手に使って教員採用試験の勉強をしている仲間がいるので力強いし、支えになっている。」と話してくれた人がいました。「疲れていても電車の中で一生懸命勉強をする。これだけはやり続けました」ということでありました。

「自分だけでなく〇〇さんも同じように電車にゆられながら、居眠りしないで勉強しているんだなあと思うと自分も不思議に頑張れた。」という話でありました。しっかりとした高い目標と、何のために自分が頑張っているのか明確になっている人は、私は間違いがないんじゃないのかなと思っています。

３　「岩手の教育が目指すもの」

次は大きな３番です。「岩手の教育が目指すもの」ということであります。

岩手の教育が目指すものは「知・徳・体」を総合的に兼ね備えた、社会に適応する能力を育てることにあります。社会に適応し、自己実現のための「人間形成」が最終的な目標であります。これが本県の教育が目指すものであります。県教委のＨＰからダウンロードすることができますので参考にしてください。是非読んで欲しいと思います。「岩手県教育委員会」、「これからの岩手の義務教育」と入れればヒットすると思います。私たちの目指すものとしてのバイブルであります。中身についての解説は致しませんので是非いつか見て頂きたいと思います。

皆さんの小学校、中学校時代の時よりも強く進めていることとして「地域連携」があります。先日も地区毎の校長研修講座がありましたが、そこで取り上げているのが「地域との連携」であります。今、子ども達の教育は学校単独で成立するものではなく、学校が牽引役となって家庭や地域を巻き込みながら、教育を推進していく必要があります。

家庭や地域にある資源を学校の中に取り組みながら、一体となって子ども達を育てていかなければ学校経営は成り立たないと思っています。よって、「地域との連携をもっともっと進めていきましょう。」ということを学校に対してお話をしております。学校は多忙化だということもあります。そのような中で地域に出ていって、夜だったり、土曜日だったり、日曜日だったりすることもあるんですけども、そこで考えられる効果は非常に大きいものがあります。さっき、自己マネジメントの話もしましたが、上手に時間を使いながら地域とのやり取りの時間を確保することが求められます。

校長先生が中心になると思いますが皆さんはそういう時代の学校で勤務することになるということであります。社会教育も非常に大事だと思います。是非、そういう考え方を大学の方でも学んで頂ければ有難いと思います。

４　「子ども達の実態」

（１）　県学調の結果からみる本県児童生徒の実態

「子どもたちの実態」４番になります。

（１）は、県学調の結果からみる本県児童生徒の実態についてでありますが、学習結果を確認する調査としては、文科省が全国を対象に行っている学習状況調査があります。それ以外にも県で実施しているもの、市町村独自で行っているものがあります。

全国で行っている調査の対象は、小学校６年生、中学校３年生、県で行っているものは小学校５年生、中学校１年生、２年生となりますので、教科は異なりますが小学校５年生から中学校３年生まで継続的に子ども達の学力の推移が把握できるようになっています。

昨日の仁王小学校での学校公開でも全国学習状況調査のデータ等を用いて研究の成果を発表していたところであります。私は県の立場なので県の学調の方でお話しをさせて頂きますが、分析方法については様々工夫がされておりまして、経年比較の問題とか、活用問題なども取り入れるなどして、各学校が指導方法の工夫改善に生かせるような取り組みになっているところであります。

平成２５年度から、「見るデータ」から「使うデータ」にしていきましょうということで、教育センターが開発した分析シートなどを活用して学校独自で分析しながら個々の子ども達に反映できるようにしています。

皆さんの時代はどうだったんでしょうか？テストというと、まず点数がでてきて平均点で成果を判断することが多かったかもしれませんが、平均点で見ても個々の子どもの成長は見えてこない訳です。「平均点が８０点。よかったね。」で終わってしまいます。安心してしまう。そうではなくて、個々を見ましょう。より集団の状況をみとることができるようにということで度数分布を使うように本県はしています。そこで見えてきたことは、本県の子ども達の特徴として、「上位が少ない、その代わり下位も少ない。」どういうことかというと、下位の子ども達に手厚く指導しているところでは成果が出ていますが、中位層の伸ばすべき子ども達の力を伸ばし切れていない。という課題が見えてきているというところです。

２つ目としては、本県の重点は英語ということを言っていますが、実は英語、ここで中学校の１年の後半から既につまずいている。英語とか数学は積み重ねの教科ですから１年生でできないことが２年生になって急にできるということはなかなかないわけであります。特にも英語は小学校の高学年で教科化されることになっていますが、中学校１年の後半には英語嫌いの生徒が出てきて、２年生、３年生でどんどん拡大されていくという状況が分析されているところであります。

また、活用型の問題については「この問題は、子ども達にとってやっかいな問題だよね。」「こういう思考を導き出すのは中々難しい。」課題が見えているのですが、解決するための具体的な指導方法、授業のあり方については全県的な課題として押さえられていないのが現状であります。経年比較の問題を出しているんですが、毎年同じ課題が繰り返えされており、苦手なままで翌年度に移行している。そして、新しい１年生、２年生が同じところでつまずいている。これに対して今年度は、２４校を学力向上実践校にして、どのような取り組みが有効なのかということを研究的に進めている所であります。

次に、質問紙調査による結果からでありますが、子どもたちの学習の状況を知るために質問紙にも取り組んでいますが、特にも平成２３年度からは「わかる授業を目指しましょう。」ということでやっております。子ども達たちにアンケートを取った結果、小学校では何％位「わかる」と言っていると思いますか？皆さん！８７パーセントの子

どもが「わかる・だいたいわかる」と肯定的な回答をしているんですね。

中学校でも「わかる」と答える生徒の数が徐々に上昇しており、改善傾向を見せているというところが成果として挙げられております。今後もう少し、特に中学校は頑張らなくてはならないという課題も見えてきていますので、中学校教諭を希望している人、頼りにしてますのでこの際よろしくお願いします。

家庭学習の時間についてでありますが、みなさんが中学校の時、一番勉強しなかったのは何年生の時でしたか？今は中２なんです。中学校１年生は小学校からの継続で結構学習習慣がついていて勉強する。ところが中２になると部活なんかも忙しくなって勉強時間が少なくなっているという傾向が見られています。小学校５年生よりも勉強時間が少ない。１時間もやっていないというのが結構いるという状況であります。「中学校２年生をターゲットにして、もう少し学習習慣つけなきゃないね」という課題があります。

次に、質問紙でわかったこととして、自己肯定感の問題があります。「自分には良いところがあると思いますか？」という項目があります。これは、全国学調にもある項目ですが、皆さんだったらどう答えるでしょうか？「非常にある」「だいたいある」「まあ、ある」「ない」「全然ない」どこに○をつけますか？これは、少しずつ上昇していますが、肯定的な回答は、小６で「まあまあ何とか」７４パーセント、中３で６４パーセント、まあ６割くらいの子どもたちは「僕できるよ」「僕は僕が好きだよ」という感じなのですが、４割くらいの子は「俺はダメなんだよ」「自分に自信がない」という回答であります。成長段階から見てそういう時期なのかもしれません。岩手に限らず、先進国の中において日本の若者の特徴としてもそういう傾向があると言われています。その日本の中で、岩手県の子どもたちは自己肯定感が低いという傾向が出ています。

一方で、本県の大きな問題として「全国一自殺率が高い」、ということも挙げられているわけで、自己肯定感を強く持ってたくましく生きていくという状況を子どものうちから作っていくにはどうしたらいいか、ということは早急に対応していく必要があります。いずれ県の学調の結果、ホームページで全部見られます。全国学調の結果については、都道府県ごとの結果も含めてインターネットで全部見ることができますので、閲覧して頂ければ。興味のある方は、結果を比較して見たりすることで様々な状況が見えてくるかもしれません。

（２）　行動調査の結果からみる本県児童生徒の実態

次に（２）行動調査の結果からみる本県児童生徒の特徴についてであります。

震災から４年３か月というところでですが、実は阪神大震災の際に発災から３、４年で一番心が不安定になっていたということがありまして、本県では、「心と体の健康観察」を実施しています。

今年度も９月に各学校で行われますけど小中学校と特別支援学校、全県６１５校で１２万８千人を対象に実施されるものであります。複数年度にわたってこれだけのデータを取って子ども達の心の有り様、経過を見ていくといことは世界でもあまり例がないと聞いています。主担当ではないので詳細については分かりかねますがそう聞いています。

過去４回実施しているのですが、要サポートこれは過覚醒・再体験・回避麻痺・マイナス思考のうち、心配な要素が１つでもあるという子どもの割合が、平成２３年度では１４．６％だったものが、昨年度は１１．９％に減少している。

だから、それこそ平均で見れば、まあいい方向に行っているのかなあという事なんですが、ただ４年くらい経過している段階でまだ１割ほどの子どもが何らかの心のサポートを必要とするものを抱えているという状況にあります。この中で、中学校がここにきて増加傾向を示しているのが気になります。減少傾向を示しているのであれば時間の経過の中で落ち着くのかなあと…。ところが中学校がここにきて増加している。何で増加してい

ると思いますか？街並みも整い明るい話題も聞かれるようになり、沿岸地区の復興も進んでいるように思われる中、不安を抱えている中学生が増加傾向にある、さてどうしてだろうということであります。

これは、仮設住宅での生活が長期化し、保護者の仕事がうまくいかないとか家庭内の不安定要素からとか。そういういろんなものがジワジワと出てきて、震災直後はまだ小学生で深刻さが理解ができていない状況だったものが理解できるようになったり、中学生になったら隣の家の人は再建して仮設を離れたり…。自分の家はいつまでも仮設のままで再建の目途が立たないなど、様々思い悩むことが出てきています。直接的な震災の影響というよりは、日常生活の中から生じるストレスということが心配されています。学校では、そういう子どもの状況を見取ったり、支援することも求められているということも覚えておいて頂ければと思います。

その中でも明るい話をすれば、国の調査で「問題行動調査」というのが２年に１回行われます。その中で児童生徒の千人当たりの不登校の出現率が公表されていますが、私の持つデータが間違いでなければ、千人当たりの不登校の出現率、何人ぐらいだと思われますか？千人いれば何人ぐらいの不登校児童がいるか、本県は２．３人です。秋田県２．２人、宮崎２．２人、福島県２．３人、愛媛県２．３人。この２．３人は全国３位、本県は全国で３番目に不登校の小学生が少ない県であります。

一方、中学校では１９．７人、やっぱり中学生ではその数が多くなっていきます。１９人台でとどまっているのは岩手県のみ。全国で一番不登校率が低いのが本県中学生であります。

マイナスのことを言われることが多いですが、本県は「全国一不登校の子ども達が少ない県」であります。個別にみると課題はありますが、様々な辛い経験をしながらも、子ども達は学校での生活を楽しみにし、先生方も子ども達の期待に応えるような学校運営がなされるよう努力していることが、このような結果になっているものと思います。

先ほどの映像に七夕の映像が出ましたけれど、被災直後の夏、ある被災地の学校を訪問した時に体育館に七夕飾りがあったそうです。短冊には、「仮設住宅が当たりますように」とあったんです。仮設住宅に入ることが最高の喜びだったんです。ところが、２年目に同じように訪問したならば短冊には、「早く仕事が見つかりますように」親の仕事を心配する短冊が多く見られるようになった。３年目になるとですね、「パテシエになれますように」ようやく自分の夢が語られるようになった。４年目に、さて、次は何なのかな？という風に思ったら、「家族が幸福に過ごせますように」「町の復興が進みますように」自分のことでなく周りの幸福というか、周りのことを短冊に書くようになった。自分のことよりも他人のことを思いやれるような子ども達たちが、被災地ではたくさん育っているという事であります。まだまだ厳しい状況でありますけれど、子ども達は確かな成長を見せてくれています。いずれ教育に携わる者として、今後も一人ひとりの子ども達に目を向けて、確かな成長につなげていかなければならないと思います。

話は変わりますが、昨日、仁王小学校の学校公開がありましたが、仁王小学校の校長先生からある本を紹介され、「いやいや大変なことだ」と、私もその本を買って読みました。何かというと、スマホの問題であります。被災地であろうが内陸であろうが、どこでも関係なくジワジワと本県の子どもたちにスマホ利用が浸透してきています。これから担任になる人達は、この利用について生徒指導上非常に悩まされることになると思うので、ここで紹介します。

教育センターにおいてスマホやタブレットを利用してこんな怖さがあるんだよ。使い方はルールを守りながらやらないと大変なことになりますよ。という様な体験型の研修を行っています。または、ＮＴＴとかラインとかグリーとか業者関係の方々を呼んで情報モラルに対する研修会も一部

行っておりますが、紹介された本というのは、「インターネット・ゲーム依存症」という本なんですが、冒頭では、こんなことが書かれていました。

２０１２年中国の大学の研究所の教授がインターネット依存の若者１８名とそうでない若者１７名の脳の画像解析を行ったところ、依存者の脳に異常がみられ、コカインや大麻、ヘロインなどの麻薬中毒患者に認められるものと同様のものが発見された。脳みそが壊されていくんだという話です。インターネット依存の脳は、麻薬中毒者の脳と同じことが起きている。これは、インターネットやゲームのやりすぎで脳が壊れてしまっている。それがもう現実味を帯びている。壊れた脳の一部は、やってはいけない行動にブレーキを掛けたり、逆に報酬が与えられる行動に意欲を出したり、善悪や価値判断をしたりすることに重要な役割を果たしている領域なんだそうです。

インターネットやゲーム依存は「デジタルヘロイン」と言われているそうです。特に小中学生はオンラインゲームにはまると、小さい端末でも遊べるものですよね。部屋に入って行っていても親は気付かないし、相手が成人だったりしても分からない訳であります。そうすると、夜中ずっと入り浸っていてもそれに気づかない。　子どもの脳は、大人の脳に比べ非常に敏感なわけですから、その影響も著しく大きいということになります。

現代のアヘンが子ども達を蝕んでいると…。その他にも様々な症例が示されていますが、健常で優秀な人が中毒化し壊れていく例が科学雑誌やネイチャーに掲載されていると紹介されていました。例えば５０分ゲームを行なったとき、脳内ではドーパミンというものの放出量が２倍に増えるんだそうです。ちなみにこれは、ある覚せい剤で０．２ｍｇを静脈注射した時と同じ量に匹敵しておりドーパミンの放出は快感をもたらすが、脳はより心地よい行為を繰り返そうとしてより多くのドーパミンを求めるようになる。いつの間にか、行為を繰り返してしまいついには無気力、無関心でキレやすい人間になってしまう。麻薬を注射するのと同じ状況の脳を作り出してしまう。子ども達をインターネットやゲームから守っていく必要がある。

子ども達に酒やたばこ、ましてや覚せい剤を与えるような大人はいない訳ですけれど、インターネットやゲームをのべつまくなし与えるということは、酒をやりなさい、たばこをやりなさい、場合によっては麻薬を注射しなさいと、注射してもいいですよ、許しますよと言っていることに等しいというように筆者は言っていました。

こういう時代を生きる子ども達に対し、私達は何をしなければならないのかという自覚をもって、教育にあたる必要があります。

（３）　体力・運動能力調査結果からみる本県児童生徒の実態

３番、体力面についてであります。

男女とも体力がどうなっているかと言えば、全国平均を若干上回っている状況にあります。平成２０年度スポーツテストの結果を見ると、小学校５年生男子が全国で16位、女子が９位、全体でも１５位。中学校の男子は８位、女子は５位、総合で６位にランクされていました。小中総合で換算すると8位にランクされるというデータを見たことがあります。平成20年度はトップテンに入っている位の基礎体力が認められていたということからすると、現在の本県の子ども達の体力・運動能力は残念ながら落ちているということが言えます。

一方、学級担任になったなら、またはこれから教育実習に行くような人は知っていて欲しいのですが、小学校５年生の男子の肥満出現率が１４．７％（全国比＋４．７％）。ぷっくりした体が多いのですね。女子の方で１２．３％（全国比＋４．５％）、１割以上がふっくら型ということであります。中２では男子の出現率が１０．１ポイント（全国比＋２．２％）、女子が９．９％（全国比＋４．５％）ということになっています。

いずれ、小学校も中学校も肥満が増えており、何とかして運動させる環境を作りたいなと。「スポーツ好きですか？」と質問すると男子も女子も比較的「好きだ」と答えてくれます。でも、１週

間のうちで全く運動しない児童・生徒を見ると、小学生男子で２．５％、女子で３．８％、６０分未満も加えると男子が５．７％、女子が１２．４％。ということは、小学校の５年生で１週間のうちでほとんど運動しないのが１割超えています。家の中ばかりで過ごしているということであります。

中学校になるとどうかというと、中学校は部活があるので何とかやれていますが、１週間のうち６０分未満、ほとんど運動する習慣がないと思われる生徒が、男子は３．６％。女子は、１６．５％です。２割まではいきませんがこの女子の子ども達はほとんど動けていないということになります。思春期の体を作る大切なこの時期に体を動かしていないということは、大変なことだということであります。

そこで県としてはスポーツ健康課を中心に「ロクマル（６０）運動」、１日に最低でも６０分は体を動かしましょう。スポーツでもなんでもいいんですが、体を動かす習慣を子どものうちにつけましょうという運動を展開しています。

いずれ、これから教師を目指す皆さん方は、学校現場に入った時には先頭に立って運動して欲しい。運動が得意不得意は別として、子どもと一緒に体を動かして、そういう習慣を子ども達に身につけさせて欲しいという事であります。

５　「教員採用試験」

次に５番、教員採用試験についての話であります。ようやくこのパンフレットにたどり着きましたが、これが本年度作成したものであります。もう願書を提出した方もあろうかと思います。２年生、３年生等の方は、過去の倍率や採用人数についても示してありますので参考にしてください。

新聞で今年度の採用について、「小中学校の採用は５０人増」となっていましたが記憶にあるでしょうか。小中学校教諭、養護教諭は採用数が増える方向に推移すると思われます。児童・生徒数の減少や学校統合が進む中にあって採用数が何で増えるんだという風に思うかもしれませんが、退職する方々、定年退職する方がどんどん多くなってきます。子どもが減るよりも定年退職等でやめる先生が多いという状況がありますので、採用としては明るい見通しであります。定年退職以外にも途中で退職を希望する人がおりますので正確な数をつかむことはできないのですが、いずれ数年間その数は拡大すると予想しています。数年後には今の２倍。３倍にまではいかないと思いますが、実数で２００か２５０位…。

本県が求める先生の具体像についてはこのパンフレットに示してあります。めくっていただいて左側の方に３つ示しています。「実践力と行動力のある先生」、「人間性豊かな先生」、「情熱溢れる先生」。より具体的な目標として①～④に示しており、例えば、分かり易い授業ができる等々ということがありますので、本県ではこういう先生を求めているんだなと知っておいて頂ければと思います。

ここに書いていることは、大体他県も同じような内容でありますが、これからの時代を生き抜く子ども達に必要な力を身に付けされるためには、これまでとは異なった形の教育が求められるということも考えておかなければなりません。

今は、まだまだ黒板とチョークが主流で、ちょこちょこっと電子黒板があったりとかiPadを使った授業がみられるようになってきているという状況ですが、これはグローバル化だとか少子化という社会情勢の中にあって、子ども達一人ひとりにもっともっとしっかりとした力をつけていかないといけない背景があります。１０年後、２０年後、３０年後を見通した新しい教育の型が求められると思います。

私が初任の頃は、ガリ版、鉄筆、修正液、皆さん知らないですよね。そういう時代だったんです。ビデオテープは１本千円以上で、それでも欲しくて欲しくて…。そういうの知らないですよね。カセットテープレコーダとかレコードが教材。レコードは知っていますよね…。ワープロがパソコンになってスマホになって…。子どもが家でiPadを使ってユーチューブで「授業の達人」の動画を見て、予習してから学校に来るような時代であり

ます。子ども達から「ユーチューブの先生の方が分かり易い」なんて言われるかもしれません。そういう時代が来るかもしれないわけであります。

今後、技術革新によって様々な便利な機器が導入されるわけでありますが、その機器を使いこなすスキルを身に付けることが重要になります。しかし一方で、機器はあくまでも道具でありまして、道具に振り回されない判断力が必要であります。授業を見ているとIT機器を使うことが目的になってしまって、「こんなことに使うんだったらノートと鉛筆でいいのに」なんてことが実はあったりして、そこをちゃんと見極める必要があります。授業参観をしていると、子どもが背中を丸くしてですね、鉛筆を棒つかみというかこうやって書いても、平気でパソコンを操作している先生がいたりします。それを見ていると違和感を感じます。これでいいのかなあ、学ぶ姿勢、背筋を伸ばして鉛筆の持ち方はこうなんだよ、筆圧なんかもこうなんだよ、そういう基本的な部分が抜け落ちている気がすることもあります。

「不易と流行」という言葉がありますが、不易というのは、時代を超えて変わらない価値があるもの、いつの時代でも教育にとっては忘れてはならないのを「不易」と呼んでいます。一方「流行」、時代の変化とともに変えていく必要があるものというものがあります。俺は俺だと２０年以上も全く変わらぬ授業というわけにはいかないわけで「不易と流行」を意識しながら時代に即した教育を進めていかなければならないという事であります。

さて、教員採用試験を目指すかどうかは別として、これから社会人を目指す方々が大多数であります。私が、「なるほどなあ」と思った漫画で「課長島耕作」という昔の漫画があるんですが、その中で見つけたセリフの中で「学生時代は自分と気の合う人とつるんでいればよかったが、社会に出ると自分の嫌いなタイプの人間とも仕事をしなければならない。そこは覚悟を決めなければならない。」という内容の言葉があったんです。学生の時は好きな人といて楽しくて居心地よければそれでいいが、一方、社会人になるということは馬が合わないような人、そういう人とも自分から進んで付き合っていく覚悟、そういう人からもいろんなことを吸収する力を養っていかなければならない。そういうことが学生と社会人の違いだよねと島耕作が言っていました。なるほどなあと思ったところであります。

その話と繋がるかどうかわからないですが、魅力的な社会人を目指す。魅力というのは、今の自分の価値観の中に留まっていたのでは広がりや深まりは期待できない。苦手なことがあっても飛び込んでいく勇気が必要だと思います。若い皆さんだったらなおさら、失敗とかプライドとかあまり余計なことを考えずに、ひたむきさや、一所懸命さで勝負することが大切だと思います。今の学生さんを見ていると、非常に優秀なんですけれども骨太さを感じないというか失敗することにナーバスになっていることが気になります。大丈夫です、思いっきりやってくださいと言いたいわけです。魅力的な人間を目指して欲しいのであります。

例えば、田中将大は平成２５年に２４戦０敗、６点取られてもチームは７点取ってくれるんです。１点しかとられないのに０点で負けるピッチャーもいるのに、マー君が投げると逆転してくれるんです。どうしてそういうことが起こるかと言うと、「打たれても負けない運のいい選手」これは、いい行いをする人は周りに評価され、信頼される。やがてその人の援軍となり協力者を増やしていく。その人に大きな力を与えてくれるようになる。

結局、マー君はチームメイトに信頼されているということだそうです。何でマー君がそうなっていくかというと、取り組む姿勢なんだそうです。信頼を得るには、取り組みがチームメイトから評価されている。一流に「超」が付く選手は、ただ野球がうまいというだけでなくて、人間として尊敬できる存在である。だからいい結果を出す。その姿勢が評価されお手本になっている、それを「超一流になる」ということだそうであります。

どうでしょうか皆さん。１か月後教員採用試験

を迎えようとしている人達であります。一生懸命取り組んでその姿勢が評価されているでしょうか？「最近〇〇さん頑張っているね」一生懸命であるということは自分で決めることでなくて周りが決めるのです。自分は、一生懸命取り組んでいるつもりがなくても家族や後輩が「最近顔つきが違いますね、一生懸命頑張っていますね。」という言葉をもらえれば、「私って、頑張っているように見えるんだ。」ということになり、周りからの評価は自分の大きな励みにもなると思います。

こんなお話もあります。ある遊園地で風船を売っている人がいたんだそうです。風船が売れない時はどうすると思いますか？「今日はちょっと風船が売れないなあ」という時は風船屋さんは風船を飛ばすんだそうです。風船のヒモをプチプチ切って何個か飛ばすんだそうです。そうすると子ども達は、飛んでいる風船を見て欲しくなる。考えてますね。ある時、いつもの通り風船を空に飛ばすと、後ろから裾を引っ張る子どもがいました。その子どもは次のような質問をしました。「黒い風船でも飛ぶの？」黒い風船ってあまり見ないですよね。子どもは、黒い風船は飛ばないんじゃないかと思っていたのでしょう。「黒い風船は飛ぶの？」皆さんだったら何と答えますか？その風船屋さんは、「風船を飛ばしているのは色ではなくて中に入っているものなんだよ」といったんですね。色ではなくて中身なんだということです。黒だって、赤だって、黄色だって、色が問題なのではなく中身であるということです。

これも姿勢とか態度の話であります。どうせ自分は黒い風船なんだと決めつけ、それ以上の自分になろうとしない。躓いてしまうと「ああ、ダメだなあ」とため息が出てしまう。そこで「いや、俺は飛ぶんだ」というような気持ち、「飛び上がるんだ」という気持ちを持てばいつでも人生が開けて飛ぶことができるんだということだと思います。チャンスは平等であります。受験を控えている方、自分は「飛ぶんだ」という気持ちを強くもって頑張って頂ければと思います。

６　「終わりに」

それでは最後になります。本日は、特に若い皆さんが参加しております。お願いしたいことは、話の中で何回か言いましたけれど、人とか、物とか、出来事とか、音楽でも、映画でも何でもいいんですが、たくさんのことと関わって、たくさんの経験をして欲しい。いろんな人と出会い、いろんな出来事に触れる。いろんな音楽、いろんな本からたくさんのことを学んで欲しいということであります。

今日のような機会に人の話を聞くことも勉強になるとは思いますが、実体験を通して学ぶことが生きた力になる。人と接することで自分が磨かれ、自分の魅力が増していくということであります。様々な経験を通して感性が磨かれていきます。世の中にはいい人もいればそうでない人もいるかもしれません。それも現実です。しかしそこから「こういう考え方の人もいるんだな」「こういうことも世の中にはあるんだな」とそういうことを丸ごと感じ取って欲しいのであります。そうすることによって、多様なことに対応できる力が備わります。

例えば学校の中で起こるたわいのない出来事の中にも、「えっ？」と感じるようなセンサーを身につけることができるようになると思います。まず察知する感性がなければ、行動に繋がらない訳であります。子ども達の表情の中に、「今日の〇〇さんは、表情がちょっと暗い、なんか悩んでいるようだ。」とか、「いつもと何か違うような気がする。」というように感じる力が先生には求められます。膝をすりむいて怪我をしているようであれば、「どうしたの？転んだの？保健室に行く？」と声をかける。これは誰でもできます。でも、体と同じように心がすりむけた子どもがいたときに、それに気付いて「どうした？先生に話してごらん。なにかあったの？」という言葉をかけてあげることができるかどうか…。先生一人ひとりの感性によります。

こんな話があります。ホスピスに余命半年と宣告された患者さんがいて、その奥さんが付きっき

りで看護していました。解熱剤を投与してもなかなか効かない。その奥さんは「この薬効かないようなんですが？」看護師さんは薬の説明をしながら「別の薬の副作用もあってまだ効果がみえないようですね。でも、もう少し頑張りましょう。」と丁寧に説明した。そんなことが１週間も繰り返えされていると、ナースステーションでは、あの人はクレーマーなんじゃないの、なんていう風に問題になってくる。そんな時にベテランのお医者さんがやってきました。その奥さんは聞きました。「熱が全然下がらないじゃないですか。」くってかかった。そのお医者さんは説明するのではなく、一言「奥さん、つらいね。」。すると、奥さんは、その場に泣き崩れた。それから二度とそんな質問はしなくなったんだそうです。

結局その奥さんが聞きたかったことは、薬の効果でなくて自分の夫がなぜ死んでいかなければならないのか、そのやるせなさを訴えたかった。誰かに聞いてほしかった。薬の効き目について丁寧な説明を求めていたのではなかった。それをお医者さんは、ちゃんと分かっていたということであります。看護師さんとお医者さんの違いは、お医者さんは感じる力、そして患者さんの心を見抜く力があった。奥さんが求めていることに対してちゃんとした答えを持っていたという事であります。

世の中には、光と影、昼と夜、男と女、みんな両面でできています。光だけではなく影からでも学ぶことは可能であります。山に行って「自然はいいな」ということもあるでしょうし、都会にいることで自然に触れることができないからこそ「自然っていいね」と考えることもあると思います。

いずれ真理は一つでありますので、どこから学んでも真理にたどり着くことができます。要は、「どんなことからも学ぼうとしているか」が問題なのであります。普通はうまくいくと嬉しいし、うまく事が進まないとイライラして嫌な気持ちになりますが、実は世の中には、うまくいかないことの方が多い訳で、うまくいかない経験からうまくいくための方法を冷静に学び取る力があるかどうかにかかっています。このことに長けている人が成長できる人であります。

うまくいかないことから学ぶことが成長した自分を作ることなんだ。だから、成功からも学べますが、失敗からも、叱られることからも、心地よくないことからもたくさん学べるんだということをわかって頂き、とにかく挑戦して欲しい。多面的な目を養うためには、若いうちから様々な価値観に出会い、学ぶ必要があります。引っ込み思案にならないで、失敗を怖がらないで、とにかく挑戦して欲しいということを言いたいのであります。「若い時に汗を流さないと年を取ってから涙を流すことになる」という言葉があります。今いっぱい汗を流して頂きたいということであります。

時間となりました、有難うございました。

平成２７年度　教育講演会

宮古市立宮古小学校

教諭　坂下　大輔　先生

津波に襲われた小学校で
子どもを支えた4年間の軌跡

宮古市立宮古小学校
教諭　坂下大輔

今日の内容

前半	後半
1　震災で「教員」として考えさせられたこと 2　震災時の経験（4年間） ①船越小学校の紹介 ②震災当時 ③青少年の家1年目 ④青少年の家2・3年目 ⑤新校舎	3　現在の被災地の様子 4　課題1 震災で見えてきた課題 5　課題2 震災によりうまれた課題 6　これからの岩手の教員に求められるもの （被災地の視点から）

1　震災で「教員」として考えさせられたこと

① 教員は子どもの命を守る立場にある
子どもも職員も命を一斉に失う出来事

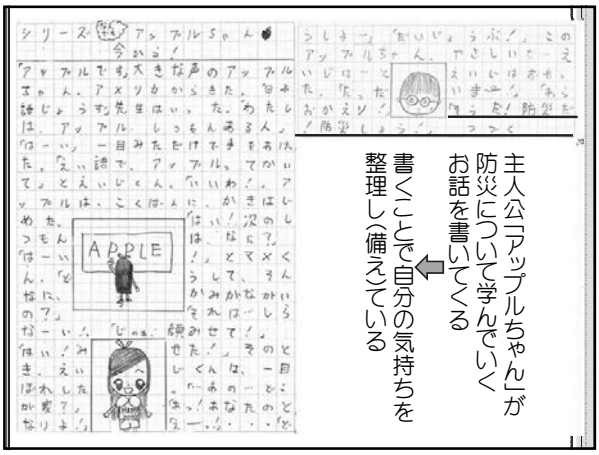
② 毎日子どもたちみんなと過ごせることは幸せ・有り難い
「全員出席」は当たり前ではない

③ 地域の中の学校という存在の意味
学校は毎日子どもが集まり、学習する場？
震災が子どもたちに残したものは…？

山田町立船越小学校　2年生
3月11日辺りの日記（作文）
現在3年生
当時3・4歳

宮古市立宮古小学校　4年生
9月、鬼怒川の豪雨災害の新聞
現在4年生
当時4・5歳

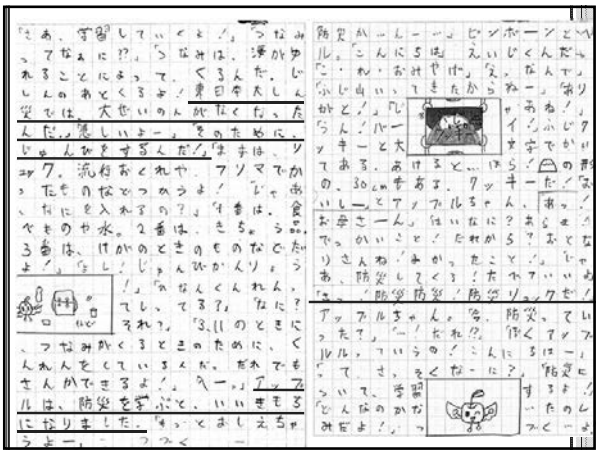
鬼怒川の映像から震災を思い出して
書いたと思われる3・11の自分の体験



主人公「アップルちゃん」が防災について学んでいくお話を書いてくる

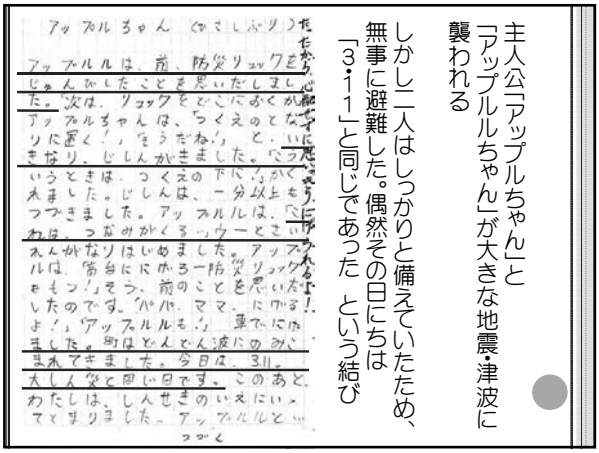
⇦

書くことで自分の気持ちを整理し(備え)ている



主人公「アップルちゃん」と「アップルルちゃん」が大きな地震・津波に襲われる

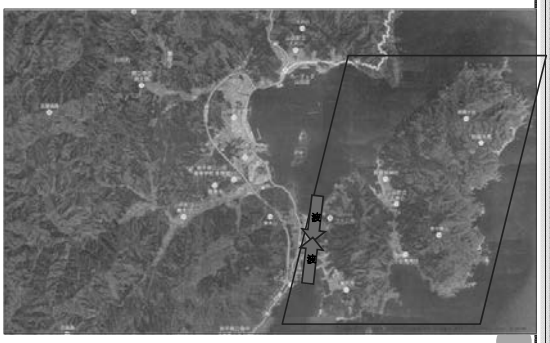
しかし二人はしっかりと備えていたため、無事に避難した。偶然その日にちは「3・11」と同じであった という結び



2 震災時の経験(4年間)

震災前の校庭

震災前の荒神海水浴場



大津波が来て浦の浜は「海」となった。
私たちのいる船越半島は、孤立してしまう。

旧校舎の場所は
船越半島の付け根

①船越小学校の学校紹介

o児童数　137人　教職員数　17人

②震災当時の様子

震災二日前の大地震

昼前、震度5発生

⇒津波注意報⇒潮位の変化あり

解除後、集団下校（徒歩・職員も）

⇒「津波」というイメージを根付かせた

震災当日の行動（2011.3.11）

1・2・3年生　下校中又は帰りの会　　4～6年生　授業中

１４時４６分　地震発生

１４時５０分　校舎から出る

⇒防寒着を取りに、もう一度校舎内へ

１４時５３分　集合場所の校庭へ

下校中児童は家へ向かう　又は学校へ戻る

・強い余震が何度も続く

・職員
- 下校した児童を追う
- 海の様子を見に行き、校庭に戻り報告
- 防寒着や携帯、ラジオを取りに戻る

・保護者　　児童を引き取りに来る

・地域住民　避難場所（校庭）に避難

震災当日の行動（2011.3.11）

１５時２０分頃

海の異変に気が付いた校務員の校長への進言により裏山に向かって避難開始

山際に着くと津波が堤防を越えてくる

約30分間、校庭に留まっていた

この時　昇降口付近と校庭に避難者2、30名ほどがいた

学校付近の様子（がれき処理後）

学校を挟んで流れる　2本の沢

津波は沢を猛スピードで駆け上がってきた

震災当日の行動（2011.3.11）

山の斜面を駆け登る⇒　山のピークで集まる

17時頃　山の麓まで下り、焚き火にあたる

夜　残った3軒のお宅に入れてもらう

- 焚き火に入れる木材の運搬
- 怪我人の救出、看護
- ラジオで情報収集
- 子どもたちは飲まず食わず
- 続く余震
- 波につかった人
- 怪我を負った人

②震災当時の様子

・山田、大槌、田の浜の大火事
・頭上を何機もヘリが通過
・雪
・ラジオでは
　「東北沿岸が広域で壊滅的被害」
　「長野で地震」
・・・自衛隊等が助けに来る可能性は？

子どもたちの体力を考えると
翌朝からの行動・決断が生死を分ける

東日本大震災の被害の概要2011. 3. 11

1529人　震災で親を亡くした子ども
　193校　津波などで大きな被害を受けた公立学校

＜山田町の被災状況＞
・被災家屋3，369　全体の46．7%

・死亡者数673人　行方不明者数148人

＜船越・田の浜の被災状況＞

	船越	田の浜
死者・行方不明者	86人	105人
震災前の人口	2，178人	1，275人
全半壊家屋（被災家屋の割合）	172戸（26%）	345戸（71%）

山田町の被害

o津波・火事により、町の中心地は壊滅的被害
　大量のがれきにより
　　主用道路×
　　役場は残ったが、孤立状態
・消防・警察は被災
・防災無線×
・電気、水道×
・携帯電話×

翌朝の行動（2011.3.12）

<u>7時頃　男性職員3名で校舎を見に行く</u>

<u>8時頃　地元の消防団10名程が助けに来る</u>
　子どもたちはおにぎり・ジューズをいただく

<u>9時頃　国道側に移動開始（3回に分けてピストン）</u>
　1回目　1年生、男性職員、消防団（片道1時間）
　2回目　2・3年生　男性職員、消防団
　3回目　4・5・6年生　女性職員、地域の人々
橋の所で待機していたバスに乗せる→船越保育園へ

本校の被災状況

o地震により、校庭が地割れ
o校舎2階まで津波が達す
o①児童・職員は裏山に逃げ
　②保護者に引き渡した児童
　　（学校屋上へ逃れた児童・家族も）
　③下校・欠席・早退した児童
　　} 無事
⇒<u>全員の無事が分かったのは1週間ほど後</u>

o本校児童の被災状況
　死亡　0人　自宅被災　35／132戸
　親をなくした児童　3家庭

避難所での生活（船越保育園）

- 仮の職員室を船越保育園に設置
- 卒業式、週に一度の登校日、出前寺子屋
- 子どもの安否確認（避難所を回る）
- 校舎のがれきから物探し・処理
- 校舎二階から使える物の救出・運び出し
- 保育園で避難所運営（の手伝い）
- 新体制づくり・新年度準備

・職員は4日後　徒歩・ヒッチハイクで帰宅
・道路が通行可＆路線バス運行開始まで
食糧・着替えなどを持って徒歩・ヒッチハイクで仮職員室に通う
・4、5日程度山田で過ごし、1日帰宅するリズム

避難所での生活（船越保育園）

・1つの教室
：高齢者介護施設の方々
・2つの教室
：地域の方々
・大部屋
：地域の方々と船小職員

〇電気・停電
・復旧が地域により異なる4日～1か月以上
・発電機・灯油は配給で制限あり

〇水
・湧水がある所での水くみ・川で洗濯

避難所での生活（船越保育園）

〇食事
・買い物すぐに売り切れ
・翌日、二日目くらいはせんべい・キャラメル
・救援物資（3日以内には届く）

〇トイレ
・女性はトイレで。男性は外。
（仮設トイレは後でできた）

・・・地域では生きるために皆が必死な姿

避難所での生活（船越保育園）

・保護者の児童の迎え
3月12～14日の間で概ね完了

・子どもを連れて行けない保護者
無事を確認し、保育園に置くことも

・最後まで迎えが来ない児童（1名）・・・親戚に

避難所での生活（船越保育園）

・後に山田中学校に職員室を移す

本格的に新年度準備
被災した校舎から運び出したパソコンで
新年度経営計画・職員会議資料を作成

青少年の家での生活

- 船越地区にある
県立陸中海岸青少年の家の間借り生活

★実践学の塚野弘明先生、学生のボランティア
（被災した校舎から本の運び出し）

4月25日、2週間遅れで1学期が始まった

青少年の家での生活

船越小だけでなく・・・

・同時に入った大槌町立大槌小学校
　体育館・会議室（パーテーション）
　和室も廊下も教室

・1年目途中までは避難者と生活

③青少年の家1年目（6年生担任）

o家庭環境の変化
　家族を亡くす　自宅の損壊　家族の不安定
⇒学校にいる時だけでも日常を感じさせよう

　とは言え、学校も非日常的環境
　　・教育環境▲　　・マスコミ　　・イベント

●子どもたちは　<u>変に落ち着いていた様子</u>

③青少年の家1年目（6年生担任）

担任の悩み　他校はどうしているか…

被災児童とどうかかわっていくか
毎日何と言葉をかければ…

震災とどう向き合わせるか
向き合わせてよいか…いつ、きっかけは？

6年生の役割をどう果たしていくか
学校のリーダーだが…活躍の場は？

6年生に何を残させるか
喪失ばかりの中…何を残せるのか…

③青少年の家1年目（6年生担任）

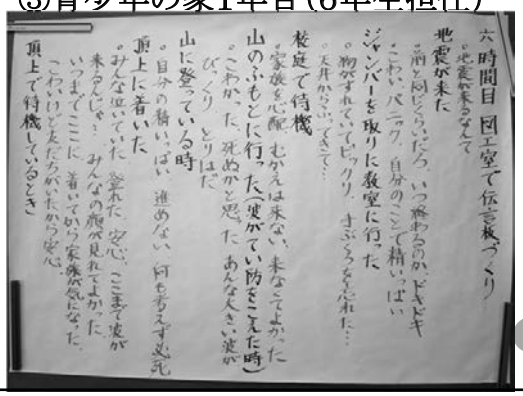
o「歌を作ってはどうか」 提案
　歌なら「心の支えになる」「今後も残っていく」

＜担任の考え＞
・この経験に<u>蓋をすることはよくない</u>
・小学校生活の最後（節目）に
　震災について<u>一つの区切り</u>を付け
　中学進学後は<u>新たな自分</u>として出発
（この経験を直接的に消化する機会はもてない）

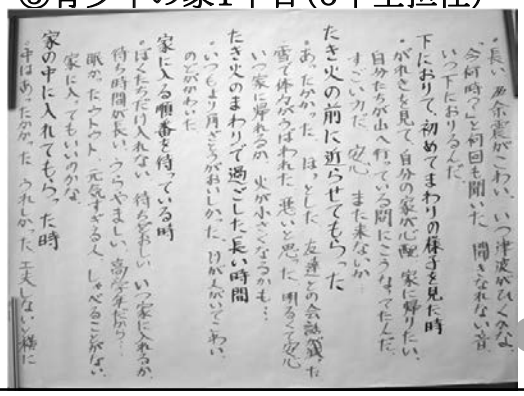
③青少年の家1年目（6年生担任）

2学期
・子どもたちに歌を作ることを提案
・初めて皆で震災について語る機会
・当時の記憶を皆で確認
（子どもたちの様子の変化に配慮）

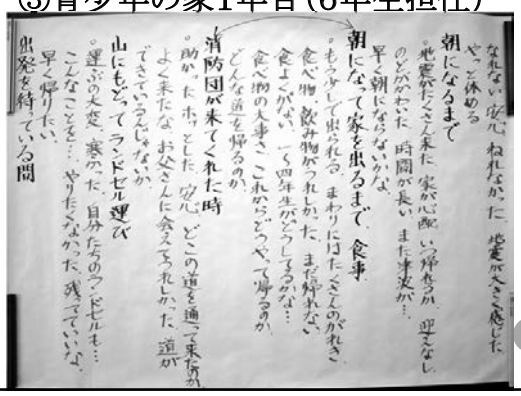
③青少年の家1年目（6年生担任）


六時間目　図工室で伝言板づくり
o地震が来るなんて
地震が来た
o前と同じぐらいだろ、いつ終わるのか、ドキドキ
oこわい、パニック、自分のことで精いっぱい
ジャンパーを取りに教室に行った
o物がすれていてビックリ、まぶろを忘れた…
o天井がゆれてきて…
校庭で待機
o家族を心配　むかえは来ない、来なくてよかった
山のふもとに行った（波がでい防をこえた時）
oこわかった、死ぬかと思った　あんなに大きい波が
びっくり　とりはだ
山に登っている時
o自分の持ものばっかり　進めない　何も考えず必死
頂上に着いた
oみんな泣いていた　疲れた　安心、ここまで波が
来るんじゃ…　みんなの顔が見れてよかった
いつまでここに　着いてから家族が気になった
こわいけどみたいから安心
頂上で待機しているとき

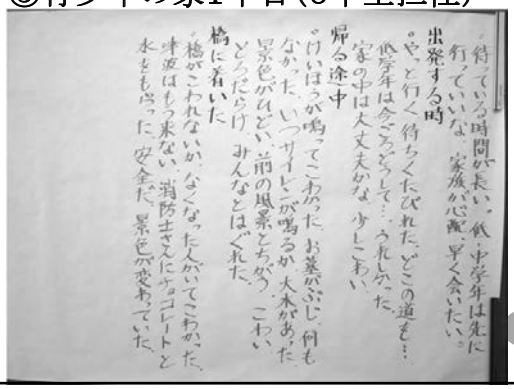
③青少年の家1年目（6年生担任）


長い、長い余震がこわい。いつ津波がくるか。
今何時？と何回も聞いた。聞きなれない音。
いつ下におりるんだ。
下におりて、初めてまわりの様子を見た時
がれきを見て、自分の家が心配。家に帰りたい。
自分たちが山へ行っている間にこうなってたんだ。
すごい力だ。安心。また来ないか。
たき火の前に並らせてもらった
あったかった。ほっとした。友達との会話。笑
雪で体がうばわれた。悪いと思った。明るくて安心
いつ家に帰れるか。火が小さくなるかも…
たき火のまわりで過ごした長い時間
いつもより月さつがおいしかった。けがよくないでこわい。
のどがかわいた
家に入る順番を待っている時
ぼくたちだけ入れない。待ちどおしい。いつ家に入れるか。
待ち時間が長い。うらやましい。高学年だから？
眠かった。ウトウト。元気すぎる人。しゃべることがない。
家に入ってもいいのかな。
家の中に入れてもらった時
中はあったかい。たっぷりかった。天ぷらない。

③青少年の家1年目（6年生担任）


なれない。安心。ねれなかった。地震が大きく感じた。
やっと休める
朝になるまで
地震がたくさん来た。家が心配。いつ帰れるか。迎えなし。
のどがかわいた。時間が長い。また津波が…。
早く朝にならないかな。
朝になって家を出るまで。食事
もう少しで出られる。まわりにはたくさんのがれき。
食べ物。飲み物がうれしかった。まだ帰れない。
食よくがない。一人四年生がどうしてるかな…
食べ物の大事さ。これからどうやって帰るのか。
どんな道を帰るのか。
消防団が来てくれた時
助かった。ホッとした。安心。どこの道を通って来たか。
よく来たな。お父さんに会えてうれしかった。道が
できているんじゃないか。
山にもどってランドセル選び
選ぶの大変。寒かった。自分たちのランドセルも…
こんなことを…。やりたくなかった。残っていない。
早く帰りたい。
出発を待っている間

③青少年の家1年目（6年生担任）


待っている時間が長い。低・中学年は先に
行っていいな。家族が心配。早く会いたい。
出発する時
やっと行く。待ちくたびれた。どこの道を…
低学年は今ごろどうして…。うれしかった。
家の中は大丈夫かな。少しこわい
帰る途中
けいほうが鳴ってこわかった。お墓がぶじ。何も
なかった。いつサイレンが鳴るか。大水があった。
景色がみどい。前の風景とちがう。こわい。
どろだらけ。みんなとはぐれた。
橋に着いた
橋がこわれないか。なくなった人がいてこわかった。
津波はもう来ない。消防士さんにチョコレートと
水をもらった。安全だ。景色が変わっていた。

「明日へ」の取り組み

・宮野幸子さんが曲を作り、一緒に作った歌。

1番　震災後の不安。明日が遠く感じた日々。
2番　離れてしまった友への思い。
3番　自分たちの町への願い。

「被災した地域の人たちに聞いていただいて、
少しでも希望をもってらいたい」
「みんなで一緒に明日を信じて頑張っていこう」
という願いが込められている

③青少年の家1年目（6年生担任）

o「明日へ」の取り組み
　6送会、3・11「明日へ集会」 で歌を披露
　保護者・地域の方々に感謝の会

・SCの配置が安定　連携開始
県のスーパーバイザー冨永良喜先生の助言

子どもに寄り添うケア　生産性のあるケア
体験を心のアルバムの中に整理させる活動
人が見える支援とのつながり

④青少年の家2・3年目

・プールや家庭科室、図工室を借りに他校へ
・跳び箱、マット　期間限定で借りる
・プレハブの理科室が完成
⇒子どもたちの居場所・活動場所に余裕が無い

青少年の家で
3年間過ごした

④青少年の家2・3年目

所長　菊池清太先生のご尽力
国内、国外から多くの支援
学校、団体、個人の方々から

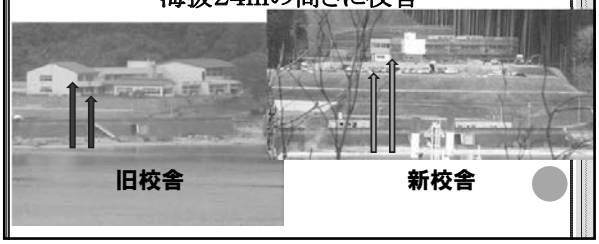
⇒震災の年には運動会、他の行事を行うことができた

生じている新たな問題

以前の地域に根差した船越小の取り組み復活できず
「定置網体験」「磯探検」「砂の造形展」「海への遠足」
学校と地域との距離感…
「仮校舎の立地」「バス通学」「新校舎移転先の問題」

校舎の場所

- 旧校舎は海抜11mの高さに建っていた
  津波は　海抜18m　に達した
- 新校舎は海抜22mの高さに校庭
  海抜24mの高さに校舎



⑤新校舎1年目

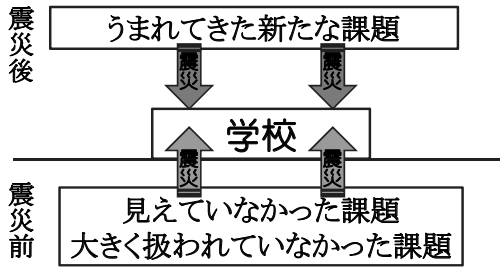
- 子どもたち
  被災した学校と同じ場所での生活に不安？
  自分たちの学校・居場所―落ち着きのある生活

- 職員
  ・新校舎への引っ越し、整備
  ・海の学習・行事の再開
  ・毎年「初めて」のことが出てくる
  ⇒早く通常の「学校」に戻したい

3　現在の被災地（山田・宮古）の様子

- 震災から4年9か月
  まちづくりの途中　地域・各産業の努力
  公営住宅　復興道路　堤防　進む

4　被災地の学校教育の課題



4　課題1　震災で見えてきた課題

①地域内の人と人とのつながりの希薄さ
- 子ども―地域の大人
- 家庭―家庭
- 家庭―学校

「学校は行政と同じ考え」
⇒保護者から「意見のぶつけ所」とされ得る

学校が地域の中にあって
実は地域の中に入り切れていない弱さ

4　課題1 震災で見えてきた課題

②地域の中の学校という存在・役割

・防災の拠点

・地域活性化の拠点

・地域のモラルの中心

学校から子ども・教師が役割を自覚し
地域に発信・地域で学習していない弱さ

4　課題2 震災によりうまれた課題

①子どもの被災の実態の多様化

ア　個人の経験の違いによる多様化
被災経験の度合い

イ　経過年数による多様化
現在小6は小1　学校での被災経験
小5以下は家庭・幼稚園・保育園での経験

ウ　家庭環境・保護者の変化による多様化
家族構成・職業・精神的な変化を
受ける子どもたち

①子どもの被災の実態の多様化

変化に対応できず取り残される子
震災から時間がたってPTSD反応
被災の影響がある子どもの隠れた存在

⇒子ども・家庭の実態を受け止め・支援
担任の見取り　外部との協力　不可欠

4　課題2 震災によりうまれた課題

②被災地の学校教育の行方

震災後に誕生した
⇒県全体「いわての復興教育」

「郷土を愛し、その復興・発展を支える人材
を育成するために、各学校の教育活動を通して、
3つの教育的価値【いきる】【かかわる】【そなえる】
を育てること」

「生きる力」の　つけたい力・伸ばしたい力が
「いわての復興教育」を通して具現化して見える

4　課題2 震災によりうまれた課題

はじめは・・・

内陸部　内陸部⇒沿岸部　一方通行の思い
被災地を助けたい・子どもたちに被災地を知ってほしい

沿岸部　内陸部からの要望過多　迎える・お礼返し
こちらは一校。相手は無数の学校。疲弊。
早く通常の生活を取り戻したい。

互いの思いの食い違い

復興を支える教育活動を
県全体で進めて行くことの困難さ

②被災地の学校教育の行方

o 被災地にとっての復興教育

復興を担う人づくり＝故郷の将来を築いていく人材づくり
故郷の再生を担う人材づくり

⇒学校教育の成果＝地域社会の将来　直結！

沿岸部は「自分の地域」に改めて目を向け直し
「地域の失われつつある宝」（人、土地、文化への愛着）
「震災からの地域の再生の歩み」
「学校が地域活性化の拠点となる教育活動」
についての学習を大切にしてきた

全県で目指していきたいこと

各教科・領域等のねらいと復興教育のねらいの融合

復興教育を進める視点
- 子どもたちの故郷を見る視点が「人と人のつながり」へ
- 地域の復興を実感しながら「共に歩む生き方」に
- 子ども・学校が「元気・希望の発信源」「地域をつなぐ存在」に

各教科・領域で「活動ありき」ではなく
子どもたちの力を人と人との触れ合いを通して伸ばしていく

子―友達
子―家族
子―地域の大人（商店街、仮設住宅、老人クラブ、…）
子―その他の大人（復興工事関係者、障がいのある方、…）

そこに～がいるから故郷を愛せる・思える

復興教育のねらいを達成する時、
同時に各教科・領域のねらいも達成されている

5　これからの岩手の教員に求められるもの
～被災地の視点から～

○大切にしたいテーマは「人と人とのつながり」
「友だち・家族・地域社会を知り、思い、行動する」

実態を知る、感じ取る⇒かかわり方を考えながら

この地域・学校の子どもたちに
どんな大人になってもらいたいか。
そのためにどんな力をつけるのか。
どんな感覚を育てるのか。
授業のどこでそれを獲得させていくか。

5　これからの岩手の教員に求められるもの
～被災地の視点から～

震災を経験した私たちにこそ感じるもの、
感じなければいけないものがある。
それらを教育に生かすのが使命。

① 教員は子どもの命を守る立場にある
子どもも職員も命を一斉に失う出来事

② 毎日子どもたちみんなと過ごせることは
幸せ・有り難い
「全員出席」は当たり前ではない

③ 地域の中の学校という存在の意味
学校は毎日子どもが集まり、学習する場？
震災が子どもたちに残したものは…？

第２回教員研修会
平成28年2月6日（土）

「道徳教育と哲学対話」
講師：立教大学文学部
教授　河　野　哲　也　先生

０　講師ご紹介

宇佐美センター長：講師の河野哲也先生は、学部、大学院を慶応大学で学ばれ、1995年「メルロ＝ポンティの意味論」で、哲学博士の学位を取得されております。この間ベルギー政府の給費留学生として同国ルーヴァン大学に留学、その後、玉川大学文学部等を経て、2008年から立教大学文学部教授としてご活躍です。主なご専門は、教育の目的や特別支援の方法研究、哲学対話研究などで、単著13冊、共編著7冊、翻訳12冊など非常に沢山のお仕事をされておられますが、近年は哲学対話教育を教育現場に導入する活動の日本での第一人者としてご活躍です。今回は、平成30年度から導入が予定されている「特別な教科道徳」の教育方法を考える手掛かりの一つとして、その「哲学対話」の方法をご紹介いただき、更にそれらを皆様にワークショップの形で実践的に学んで頂く機会にしたいと考え、河野先生をお招きいたしました。それでは河野先生、よろしくお願い致します。

１　講演要旨

パワーポイント資料掲載　（8ページ分を両面にし、計4ページ）

２　研修会の概要

（１）　参加者　およそ95名
（２）　アンケートから
① 生徒の考えを深めるための対話にいつも難しさを感じている。「自分をさらけ出す」ということを実践したい。学生の意見がとても新鮮だった。もっといろいろなことを話したり聞いたりしたかった。このような機会があればまた参加したい。（40代中学校教員）
② 哲学対話をするためにはセイフティーの保障と学級つくりがあってこそ成り立つと思った。ぜひ実践してみたい。（20代中学校教員）
③ 「道徳は進歩するもの」という言葉が深く印象に残った。何が悪いのか、なぜ悪いのか、どうすればよくなるのかを考えることが、自分自身の成長につながることをはじめて学んだ。哲学対話は誰もが話す機会があり、「なぜ」を問われることで自分の意見に対する考えも深まり。道徳の授業以外でも使えそうだと感じた。生徒がどんなことを言っても。周りや先生がしっかりと聞くという環境づくりが何より大切だと思った。（20代学生）
④ 人前で話すことが得意ではない。だから、グループディスカッションは好きではない。しかし今回のディスカッションのやりかとして、自分の意見を急がなくてもいいということや沈黙になることを恐れないということがあり、不安が払拭された。小さな疑問でも質問してよいのだと思うことができた。（20代学生）
⑤ 今日学んだ子どもの哲学は、自分が教師になるにあたって重要だと感じた。子どもの話をしっかり聞き、その意見を尊重してあげることによって自尊心が身につき、行動力のある子どもに長させてあげることができるだろうと思った。（10代学生）
⑥ 哲学対話をやってみて、収束はどのようにやるのか、最初に説明する必要があると感じた。大学生でも収束に悩んだので、小学生にやらせる場合は、先生が実際にやってみせるなどの手段をとらないと難しいと思う。また、取り上げる話題も子どもの興味・関心から引き出してあげると、より活発な対話になるのではないだろうかと考えた。非常に面白かったので、さらに哲学対話について知りたくなった。（10代学生）

教育哲学会第55回大会　ラウンドテーブル2
2016年9月17日　於：早稲田大学国際会議場

平成27年度　第2回教員研修会

道徳教育と哲学対話

ワークショップ
「対話と思考による道徳教育の実践」

◆　平成28年2月6日　13：30 ～ 15：30
◆　岩手大学教育学部　E24教室
◆
◆

考える道徳？

- 「“考える道徳”にしたい」
- 文部科学省は、「特別の教科」となる「道徳」の指導内容を定めた新しい学習指導要領の案をまとめました。いじめ問題を踏まえて、「自分の好き嫌いにとらわれないで接する」といった「公正、公平」について小学校低学年から教えるほか、「国の文化と生活への愛着」も低学年から学ぶとしています。
- 文部科学省の合田哲雄教育課程課長は、今回の学習指導要領の案について、「今まで“読み物道徳”と言われてきた道徳教育を、“考える道徳”、“議論する道徳”にしていきたい。さまざまな考え方と向き合い道徳的に考える力を身につけるための質的転換を図るのが大きな目標だ」と話しています。

趣 旨

- リップマンを嚆矢とする子どものための対話型の哲学教育は、ユネスコ推奨のもと、近年、世界各地で精力的に取り組まれています。
- 日本においても、とくに震災以降、優れた公共的意思決定を行うためには市民による議論が不可欠であり、そのための素養が教育されるべきことが理解されるようになりました。
- これを背景に、哲学対話に対する関心が高まり、子ども哲学の本格的な導入が試みられるようになっています。
- 本講演では、子どもとともに学び合う哲学とはどのような教育であり、道徳教育にとってどのような意義をもたらすのか、小中学校での実践を踏まえながら説明します。

本日のスケジュール

- １３：３０～１４：２０　レクチャー「道徳教育と哲学対話」
- １４：２０～１４：４０　グループでの哲学対話
- １４：４０～１５：１０　全体での哲学対話
- １５：１０～１５：３０　まとめと質疑応答

道徳教育と哲学対話

- アウトライン
- 従来の道徳教育の不十分さ
- 子どもの哲学
- なぜ哲学なのか
- 子どもの哲学の実際
- どのように行うか

従来の道徳教育の不十分さ

教え込み型道徳教育の問題点

- しつけはしばしば個人中心
- しつけそのものが古臭い場合がある
- 倫理的根拠がない
- 倫理的態度とは、慣習に対して反省的・批判的であるべき。なぜなら、道徳は進歩するため。
- 自分がしつけや模倣のなかで獲得した行動傾向を、倫理的に自己点検する必要性

- 単に自分の身の回りの人物に配慮するだけでは不十分。
- 万人を公平に道徳的配慮の対象とできるような包括（インクルーシヴ）な社会、すなわち、民主主義社会を構築することが必要。

ルールを教えるだけでは不十分

- 根拠が示されていない
- 一般的すぎる
- ルール同士が矛盾する
- 新しい事態に対処できない
- 本当は何がよいか誰も完全に分かっていないこと

個人中心の問題点

- 内容：旧来の単なる徳性教育（やさしさ、おもいやり、公平さ、誠実さ、他者の尊重など）や感情教育ではたりない。
- 問題点：個人中心
- しつけができていれば、道徳的に善い人と言えるか。
- 組織的不正、政治的悪、集団による排除
- 身の回りのひとには優しくても、見知らぬ人に無関心

道徳教育に必要な三つの側面

- 情意的側面＝共感力
- 認知的側面＝判断力
- 経験的側面＝実践力
- 認知的側面と経験的側面が決定的に欠けている。
- 批判的思考力の必要性

道徳教育に必要な教員の能力

- 倫理学の知識：原則を知るべきだが、万能な判断はありえない。
- 道徳心理学の理解：自己帰属集団を相対化する視点の重要性。
- 市民社会（政治）への注目：発達した社会では、道徳は公平で公開的な議論によって決定される。
- 巨大な悪の理解：ジェンダー不平等、障害者・精神疾患者排除、死刑、難民移民受け入れの弱さ、世界の問題への無関心

シチズンシップから主権者へ

- 道徳性は、社会参加の向上と正義にかなった社会の構築として教育すべきである。＝主権者教育
- シチズンシップ教育を徳育に終わらせない。
- 社会参加度を向上させ、インクルーシブな社会を作るための集団形成教育
- 実際の問題への取り組み：道徳教育を遊びにしない

道徳について本当に子どもと議論する

- 道徳とは、よい人間関係の構築である
- 単に今ある集団に適応するのではなく、
- よりよい集団を作ること
- そのために議論すること
- 議論で物事を決めていくこと
- 社会の主人公になること
- 参加とそれによる責任が道徳の基本

子どもの哲学

新しい哲学の動向

哲学の種類	方　法	結果の評価
文献学	文献解釈	専門家による評価
応用倫理・応用哲学 ('70~)	専門家との連携	現場における効果
実験哲学 ('90~)	仮説→実験／統計	科学的実証
哲学実践 ('70~)	一般市民との対話	市民のニーズを満たす

哲学実践の形態　Philosophical Practice

- 子ども哲学 P4C（集団）
- 哲学カウンセリング（個人）
- ソクラテス型対話（集団）
- 哲学カフェ（集団）
- 企業・組織アドヴァイス（集団）
- ライフスタイル・コーチング（個人）

哲学実践

- 哲学のあり方のラディカルな変化
- ソクラテス的カーニバル（バフチン）

子ども哲学（P4C）

- リップマン（Matthew Lipman 1922-2010）
- ニュージャージー・モンクレア州立大学「子どものための哲学振興」
- 論理的思考の育成を中心としながら、意味の探求を目指す。
- 初等６年間、または、小・中９年間の体系的なカリキュラム

子ども哲学とユネスコ

- 子どもとともにする対話型の哲学
- ユネスコの推奨：中等教育での哲学教育を推進し、包括的なカリキュラム開発を行うよう各国政府に求める政策勧告
- 世界的な流れ
- アジア太平洋地域会議（マニラ、2009年5月）
- 地域ハイレベル会議（2010年）

「哲学のためのパリ宣言」(2005)

- すべての個々人は、どんな形であっても、また世界中のどこにいても、哲学を自由に学ぶために自分の時間を費やす権利を有するのでなければならない。
- 現在、哲学が教授されているところでは、哲学教育は維持され、あるいは伸張されなければならない。
- また、現在、哲学が教授されていないところでは、哲学教育が導入され、かつその教育は明確に「哲学」として企画されなければならない。
- →哲学！道徳、宗教、公民ではなく

「哲学のためのパリ宣言」

- シチズンシップ教育としての哲学的討論
- （１）市民の判断力を鍛える。市民の判断力は、デモクラシーの基礎
- （２）哲学教育は現代世界の諸々の大きな問題（とくに倫理の領域における〔諸問題〕）に関して市民各人が責任を負うことを教える
- 市民の自立心を鍛え、様々な形をとるプロパガンダに抵抗する能力を有する思慮深い人間を形成する

なぜ哲学なのか

子ども哲学の著作

対話型の哲学とは？

- 読解→対話
- 知識→議論
- 個人→集団
- 専門家→一般市民

対話型哲学のモラル

- 本当に話し合いたいことを話し合う
- 人格を尊重し、しっかり聞く
- オープンな始まりからオープンな終わり方
- セイフティの重要性

「子ども哲学」の意義

- 思考力
- 生活統合
- ケアリング
- 集団形成力
- 生活統合による意欲

対話型哲学の効果

	パフォーマンス	メンテナンス
個人能力	① 思考力向上 批判的/創造的思考	② ケアリング効果 カウンセリング効果
集団能力	③ 集団的問題解決	④ 集団形成・維持力 コミットメント向上 シチズンシップ向上

なぜ、思考力とケアなのか

- 哲学教育は、なぜ思考力とケア力を、個人集団の双方で伸ばすことができるのか。
- 前提を問いなおすから：現在の行動（思考も含む）のあり方を、可能なものの１つとする。

総合的学習との違い

- ① 課題提起 problem posing (Paulo Freire)
- ② 対話過程そのものの重視
- →問いの持続：問う価値のあることを問うている。「バリュー・シェアリング」効果。
- ③ メンテナンス効果：インクルージョン
- →問題解決型は、アーレントの意味での「仕事」、哲学対話は「活動」：人間関係が問題や物に媒介されているか、いないか。

子ども哲学の実際

立教小学校･玉川学園での実践

- ２０１１年１０～１１月、それぞれ3回
- 立教小学校　５年生（４０名）×3クラス
- 玉川学園小学校課程　４年生（３０名）×1クラス

方法

- 第１回「話し合いのための問いを作る」：考えてみたい問い・話し合ってみたい問いを、子どもたち自身で話し合って決めてもらいます。
- 第２回「グループごとに話し合って考える」：話し合いのための問いを、４人１組のミニグループを作って子どもたち同士で自由に話し合ってもらいます。
- 第３回「クラスみんなで話し合って考える」：グループごとの話し合いを踏まえた上で、クラス全体でもう一度話し合い行い、テーマについての考えをさらに哲学的に深めていきます。

実践からの帰結

- 議論形式の哲学教育は、小学校から十分に可能
  →実際、びっくりするほど深く考えている
- 問答による自分の価値（共通・独自）の明確化
  →自己を表現することの重要性と面白さ
  →人格的成長
- 批判的思考の育成
  →知識を鵜呑みにしない。多角的に考える。

「こども哲学」での学び

- 批判的思考の育成
  →自律性の育成
- 私事を公的に語る
  →市民性の育成
- 集団における合意と対立点の明確化
  →タテマエ・ホンネの区別無用
- 問答による自分の価値（共通・独自）の明確化
- カウンセリング効果

どのように行うか

哲学対話とは何か

- あるテーマについて、根本的に、みんなで、考える。
- 過去の知識よりも、自分で考えて、話して、みんなの意見を聞いて、よりよい考えを出していくことが大切。
- まずは、アイデアを出してみて、みんなで検討する。
- その場で、結論が出なくても構わない。

やり方

- じっくり考える。急がない。
- 沈黙を恐れない。
- どんな意見でも、まじめに聞いてあげる。
- 発言に対して、かならず質問してあげる。
- みんなで参加する。「みんなの意見を聞きたい」という態度。
- 意見を話せなくても、しっかり聞いて質問しあげる。

大切な質問の仕方

- 理由・根拠：「なぜ？」「どうしてそう思うの？」「その理由は？」
- 意味：「どういう意味？」「定義して」「わからなかったので、別の仕方で説明して」
- データ：「具体例をあげられる？」「証拠はある？」
- 一般化：「いつもそう言える？」「こういう場合も当てはまる？」「こういう場合はどうなるの」
- 検証：「本当にそう？」

ゆっくり話そう（1）

- コミュニティ・ボールを使う：持っている人が発言する。話してもらいたい人に渡す。渡されても、すぐに話さなくてもよい。話したくない内容なら他に人に渡す。
- ゆっくり話そう：途中で話についていけなくなったら、「ちょっと分からなくなったので、少し戻って！」という。
- 質問しよう：質問をしてひとりひとりの発言を丁寧に聞いてあげよう。

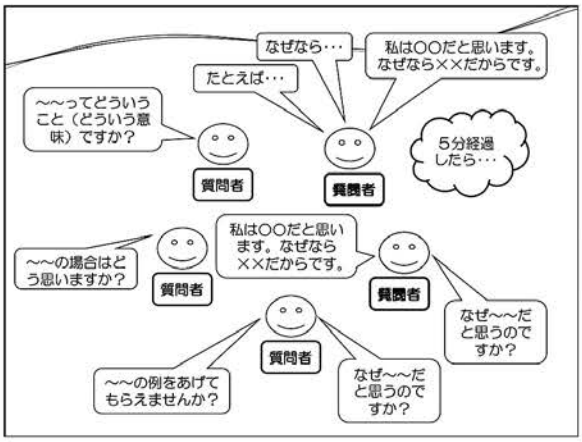
ゆっくり話そう

- まとめよう：話が早くなったら、途中経過を誰かにまとめてもらおう。
- 関係させよう：前の人の話と自分の話がどう関係しているかを説明しよう。話が脱線しかけたら、「少し脱線しているよ」という。
- 行き詰まったら別の話をしよう：新しい話をしたい場合には、「ちょっとテーマを変えるけど」。

ワークショップ
「対話と思考による道徳教育の実践」

相互問答法

- ５人１組で輪になって座る。小さな輪。
- ひとりが設問に対して答える。
- 他のみんなは、その人に順繰りに質問をする。
- 五分間経ったら交代。
- 全員に回る。



対話する哲学教室をやってみる

- 第１２章政府がなくなったらどうなってしまうのか
- 問題

やり方と心得

- Pネームを紙に書く。
- コミュニティ・ボールを作る。
- 人の話を聞いて、自分の考えを見つめ直しましょう。
- ゆっくり話しましょう。
- 過去の哲学者に言及したり、引用したりするのは厳禁。
- あくまで自分の日常の言葉で語りましょう。
- 相手を理解しましょう。
- 自分の考えを変えてもよいです。
- 無理に結論をまとめる必要はありません。
- いろいろな意見が出せれば、それでよいのです。

哲学対話のやり方

基本原則

・じっくり考える。急がない。
・沈黙を恐れない。
・どんな意見でも、まじめに聞いてあげる。
・発言に対して、かならず質問してあげる。
・みんなで参加する。「みんなの意見を聞きたい」という態度。
・意見を話せなくても、しっかり聞いて質問しあげる。

質問の仕方

・理由・根拠:「なぜ？」「どうしてそう思うの？」「その理由は？」
・意味：「どういう意味？」「定義して」「わからなかったので、別の仕方で説明して」
・データ：「具体例をあげられる？」「証拠はある？」
・一般化：「いつもそう言える？」「こういう場合も当てはまる？」「こういう場合はどうなるの」
・検証：「本当にそう？」

ゆっくり話そう

・コミュニティ・ボールを使う：持っている人が発言する。話してもらいたい人に渡す。渡されても、すぐに話さなくてもよい。話したくない内容なら他に人に渡す。
・ゆっくり話そう：途中で話についていけなくなったら、「ちょっと分からなくなったので、少し戻って！」という。
・質問しよう：質問をしてひとりひとりの発言を丁寧に聞いてあげよう。
・まとめよう：話が早くなったら、途中経過を誰かにまとめてもらおう。
・関係させよう：前の人の話と自分の話がどう関係しているかを説明しよう。話が脱線しかけたら、「少し脱線しているよ」という。
・行き詰まったら別の話をしよう：新しい話をしたい場合には、「ちょっとテーマを変えるけど」。